

---

# 魔界と魔王と働く引きこもり

ひよこ豆

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔界と魔王と働く引きこもり

### 【Nコード】

N98020

### 【作者名】

ひよこ豆

### 【あらすじ】

「やりなおしたい。」確かにそうつぶやいたけれど、誰も生まれ変わりたいとはいってない。気がつけば魔界、気がつけば魔王、しかもわたしは人間じゃなくなっていた。

個性豊かな部下に囲まれて、今日も私は引きこもる。

## 後悔はあとからするから、後悔

誰だって、人生のなかにひとつくらいやりなおしたいことがあるはずだ。わたし、仲野麻衣のやりなおしたいことは、遊びほうけていた3年間の学生時代。勉強もせず、仲の良い友達を作ることもし、ひたすらゲームと読書とネットゲームに費やした輝く青春。

気がつけば、受験戦争に乗り遅れ、大学は滑り落ち、わたしには行く場所がなくなっていた。

就職も考えたが、この不況の中、資格も学も取り柄もない暗い女の子を雇ってくれるような会社はどこにも無い。一応、面接にもいったが、冷たい視線と固い言葉にわたしはすぐ音を上げて、自己アピールをすることもなく家路に着いた。

「どうして、こうなったのかなあ。」

古ぼけた本を棚へ戻しながら、ホコリをはたく。就職も、進学もせず、とりあえずアルバイトをして過ごす。そんな生活が気がつけば2年も続いている。本屋のアルバイトは嫌いではないが、やりがいがあるという程の仕事でもない。

「もうちょっと、がんばればよかったなあ。」

今更言ってもどうにもならないとは分かっている、失った時間への後悔はやまない。

「やりなおしたいな。」

小さく言葉をつぶやいた瞬間。わたしの足下の地面がなくなった。悲鳴を上げる間もなく、わたしは突然出現した穴に吸い込まれる。

古ぼけた本屋の一角には、使い込まれたハタキとがひとつと彼女が掴み損ねた本が数冊床に落ちた。しかし、それらのほかに彼女が姿を消したことを知るものはいない。

**後悔はあとからするから、後悔（後書き）**

完結を目標にがんばっていきますので、よろしくおねがいします。

## 日本人はNOと说不ない

混乱を極めると悲鳴すらが出ないんだ、と人ごのように思う。  
本屋のバイトの制服、黒いエプロンにシャツにパンツという出で立ちで、呆然と座り込むわたしはちよつと危ない人に見えるだろう。いや、普通だったら危ない人だけど、今この瞬間はきつとわたしのほうが正常だ。

「グルオオオオオオオオ！！！」

吠える、というよりは咆哮のほうがしっくりくる雄叫びをあげて、大きな大きな犬もどきが暴れている。真つ黒な毛並みに、なぜか2つある頭、そしてゆうに5メートルはあるだろう身体に立派な牙。どうして、目の前にこんなモンスターがいるのか、さっぱりわからないが、ひとつだけ明確な事実がある。それは、夢にしろ何にしろあいつにぱくつと食べられるのは嫌だということだ。

「犬に襲われたときは、走らない、目をそらさない、叫ばない。」

小さく、自分に言い聞かせるように、つぶやく。走らないというのは大丈夫だ、腰が抜けてまず立てない。目をそらさないというものは大丈夫だ、なぜならさつきから犬もどきにもものすごい見られていて、目をそらすことが出来ないから。叫ばないというのもクリア、ひきつった身体は呼吸すらままならないのだから。

「う、あ……。」

どおん、と地面が揺れる。犬もどきがはねているからだ。もしかして、えさを見つけて喜んでいるのだろうか。しっぽはちぎれんばか

りに振られているし、よだれもだらだらと落ちている。落ちた先の床が音を立てて溶けているのは見なかったことにする。

なにがいけなかったんだろう、やり直したいという発言がダメだったんだろうか。神様が、いまさら何を言っているのかと怒ったのかもしれない。それとも、昨日一昨日と新発売のゲームを徹夜でやっていたから、店で倒れて、夢をみているのだろうか。

「できれば、夢オチ希望で・・・。」

ついに目の前までやって来た犬もどきがぐう、と喉を鳴らし首を傾げる。もし画面越しに見ていたらかわいいと思えたかもしれないその仕草も、いまはおいしそうなごはんだー、というジェスチャーにしか見えない。ゆっくりと犬もどきが顔を近づけ、生暖かい空気が麻衣にかかる。

ああ、これは死んだ。

どこか冷めた心がそう告げる。頭をよぎるのは、やりこむ予定だったゲームと、読みかけの本に、ネットゲームの仲間たちだ。

こんなときに友人のひとりも浮かばない自分がおかしくて、口角がひきつる。ああ、せめて友人というものができてから死にたかった。ぎゅっと目を閉じ、麻衣は襲いくるだろう衝撃に身構えた。そのとき、

「イーオ、待て！」

通る声、というか響く声と言うか。すばんと耳に響く声に、思わず顔を上げると、襲いかかるうとしていた犬もどきがおすわりの状態になっていた。

まだ距離も近く、しかも犬もどきの呼吸が荒いので生暖かい空気

は感じるが、とりあえず生きている。

「まったくお前は、嬉しいのはわかるが、新しい魔王様はまだ小さい。お前が飛びかかつては焼き殺されてしまうぞ。」

良い声の主は、齒磨き粉のCMに出てきそうな男前だった。正統派のイケメンは爽やかな笑顔を浮かべて、こちらへやってくる。

死の直面から脱出したばかりのわたしは、まだひどく動揺していて、全く思考がまとまらない。そんなわたしへ、男前は手を差し出し、甘い声で語りかけてくる。

「驚かせてすみません、魔王様。目覚めがひどく遅れていたのです、番のこいつは心配していたのですよ。どうやら、あまりにも大きな魔力のために器の形成に時間がかかってしまったようですね。」

ゆっくりと後ずさり、男前と距離をとる。魔王？魔力？なにを言っているんだろう、この人は。もしかして、残念な人なんだろうか。男前なのに、かわいそう。

「魔王様、どうかされましたか？」

不思議そうに聞いてくる男前からそつと視線をそらし、精神の回復を祈ってやる。男前は人生の難易度が低いと思っていたけれど、全ての男前に当てはまることではなかったらしい。神様どうかこの男前を助けてやってください、南無。と心の中で祈り終わると、ようやく落ち着いて来たわたしの思考がたくさんの情報をまとめだす。おすわりの体勢から動かない犬もどきの後ろには大きな扉、そしてわたしがへたり込んでいるのはよく磨かれた石の床。ここは大きな教会とか、神殿とか、そういったたぐいの建物だろう。豪華な飾りは無いが、どこか神秘的な空気を感じる。



「あの、ここどこかわかりますか？」

「はい、ここは魔界の中心。魔王殿の東の塔です。」

いくら危ない人でも、場所くらいは分かるだろうと思ったのに、期待は淡く散ってしまう。どうしようかと頭を抱えると、自分の記憶よりもずっとさわり心地の良い髪の毛が手をすべる。

疑問に思い、髪の毛を引っ張ると、見慣れた茶髪ではなく見事な黒髪があった。しかも、セミロング程度の長さだったはずなのに、どうみてもくるぶしくらいまである。

よく見れば、ぴったりだった服の布地がやけに余っている。そこからのぞく異様に白い手と、細い足。別に太っていた訳ではない、そういう細さではなく、これはまるで。

「子供、みたい。」

「ええ、まだ産まれたばかりですから。」

「産まれた、ばかり？」

「ええ。産み落とされて200年もの間、卵の中で眠り続けられていたのです。そして、ようやく今日お目覚めになられた。」

男前の危ない発言はこの際気にしていられない。全身くまなく触ってみたところ、あるはずの胸も無駄に着いていた尻の肉も、なにもかもなくなっているのだ。

「ど、どういふこと？」

そういえば、声も覚えているものよりずっと高い。

「まだ混乱なされているんですね、魔王さま。まずはゆっくり身体を休めてください。魔界統一はそれからでも遅くありませんので。」

危ない危ないと思っていた男前の言葉がだんだん真実みを帯びてくる。犬もどきに襲われたときはまた違った混乱が押し寄せて、頭が痛くなってきた。

魔王がわたしで、魔界統一で、姿が変わって、でも夢で？・・・夢、じゃない？

「とりあえず、寝室へお運びしますね。申し訳ありませんが、抱えてもよろしいですか？」

妙齢の男性に抱えられるなんて、いつもだったら間違いなく抵抗していたが、そんなことも考えられなくらいわたしは混乱していた。そして、なぜかこの男前は大丈夫だと勘が言っているのだ。とにかく、ここにいてもなにも変わらない。それに、夢オチの可能性も十分にある。

麻衣は、連れて行かれた無駄におおきな部屋の、無駄に大きいベッドへダイブし、すべてを拒否して、目を閉じた。

## 日本人はNOと说不ない

暖かい日差しがふわりと顔をなでる。まぶしくはないが、眠い頭を覚醒させるのには十分な光で、わたしは目を覚ます。

最近は徹夜が多かったため、こんなに爽やかな朝を迎えたのは久しぶりだ。

「今日は、水曜日だからバイトも休みだし。ゲームコンプしようかなあ。」

うとうとしながら寝返りを打つと、もっふもふなベッドが優しく身体を包み込む。・・・おかしいな、わたしの部屋のベッドはパイプベッドで、スプリングなんて高級品ついていなかったはずなのに。そこで、一気に記憶がよみがえる。犬もどきに男前、すっかり変わった自分の身体に魔王と魔界。がばつと起き上がりあたりを見渡せば、そこは無駄にひろい部屋。そして、寝ているのは無駄にひろいベッド。

「夢オチじゃ、なかった？」

柔らかい掛け布団を足で蹴り上げ、ベッドからおりる。右奥の部屋がトイレだとかなんとか説明があったような気がするから、そこへ走る。木製のドアを開け、タイルばりの部屋へ入る。そして、わたしは固まった。

「え、うそ。」

目の前の鏡に映っていたのは、ものすごく迫力ある美少女だったの

だ。美少女と言っても、笑顔やお花が似合うようなかわいい女の子ではない。多分、ホラー映画とか真っ黒なドレスなんか似合うような、冷たい美しさ。

真っ白な肌に、真っ黒な髪の毛、そして赤い唇。一重なのに、大きな瞳はものすごく冷たい色をたたえて、ひとにらみで人を黙らせることが出来る雰囲気がある。

「わたし、だよね？」

動けば、鏡のなかの美少女も動く。しゃべれば、同じ口の動きをしている。ものすごく違和感があるが、どうやらこの少女はわたしらしい。

「やりなおしたいと言っただけだよ。」

だれも、産まれ直したいとは言っていない。

いまさらどうにもならないのは分かっているけれど、後悔せずにはいられない。きっと、あのやりなおしたいがいけなかったんだ。わたしは、高校3年間をやりなおしたのであって、別に人生を丸ごとやり直したい訳ではなかったのに。

やりなおしたいをやりなおすって可能な、とぐるぐる考えていると、部屋の方から物音がした。

「ん？」

なんだろうと部屋から顔を出すと、そこには二足歩行の黒猫が3匹わたわたりしていた。

姫様が、姫様がと口々に言って、なにやら慌てている様子だが、わたしはそんなことよりも猫が立って歩いているということにショックを受けていた。

「か、かわいすぎる。」

よろよると部屋から出て、タックルするように一匹の黒猫を抱きしめる。きゃー、なんて声は気にしない、こんなかわいい生物を放っておくなんて誰が出来るんだ。

「ひ、姫様。お離してくださいー。」

「姫様、ご容赦を！」

「姫様っ。」

かたかたと腕の中で震える猫さんは、いまにも泣き出しそうな顔をしている。周りの猫さんも、ひどくおびえているようだ。いきなり抱きついたのがそんなに怖かったんだろうか。

「あ、ごめんね。」

名残惜しいが、そんなにおびえられたら罪悪感で胸が痛んでしまう。そっと離すと、猫さんはなぜかきよとした顔になる。周りの猫さんはまあ、とかええっとか驚いている。離せといったから離れたのに、なんでそんなに驚かれるんだろう。

「今度の姫様は、お優しい方なんですネ。」

突然、部屋の中から声がふってくる。何事かと視線を巡らせれば、いつのまにか部屋のソファへ人が座っていた。

「お前たちも、もう食われることはないようだよ。」

昨日の男前とはまた違った路線の男前だ。爽やかさというよりも、艶やかとか色気という言葉が合うような、美人さん。深い茶色の髪の毛を腰あたりまで伸ばして、それをかきあげる様子なんてちょっとドキドキしてしまう程扇情的だ。

「って、わたしは猫さんたちになんだと思われてるんですか!？」

色気にあてられて聞き流しそうになったけど、わたしは断じてこんな愛くるしい猫さんたちを食べたりなんかしないぞ。

「ふふ、あなたの前の魔王陛下は悪食だったのです。腹が減れば手近にいる従者をつまんで食べていたので、皆おびえているのですよ。」

ふるふると首を縦にふる猫さんたちは、身悶えする程かわいいのだが、こんなかわいい子たちを食べていたのか!

「そんな、ひどい……。」

思わず、大きなガマガエルにこの猫さんが丸呑みされているのを想像してしまい、ぶるりと震える。

「本当にお優しいですね。新しい魔王陛下は。」

くすくすと笑うエロ美人はやはり色気たっぷりだ。なぜか、少し馬鹿にされているような気もするが、そこは気にしない方が良いだろう。それよりも、わたしには聞かなければならないことがあるのだ。

「あのですね、昨日の男前さんにも言われたんですけど。その魔王

陛下ってなんなんですか。どうやら、わたしに向かって言われているようなんですが、わたし魔王なんてものになった覚えが無いんです。」

おやつと眉を上げる仕草すらも絵になれば、もはや気にしようとも思わない。わたしがこの顔で眉を上げれば、まず間違いなく猫さん泣くだろうな。

「ふむ、魔王様はなにも覚えてらっしゃらないのですか？」

覚えている、なにを？不思議そうにしているわたしを見て、エロ美人は考え込む。なにか、おかしいと言ったのだろうか。

「おかしいですね、多少人格が変わることがあっても、ここまでそっくり記憶をなくすということはないはずなんです。」

どうということなのか、視線で話の先を促す。

「魔王陛下は、決して新しく生まれません。ずっと同じ魂が魔王陛下なのです。ただ、ひとつの意識が保たれる時間は限られています。ある程度の時間を経て、魔王陛下は生まれ直すのです。傷ついた魂を癒し、より魔力を上げるために。」

つまり、ひとつの魂が何度も何度も生まれ変わっている訳だ。

「そして、その際には全てではありませんが記憶が引き継がれます。なので、魔王陛下は産まれた瞬間から全能であり全智たる存在なのです。」

ニューゲームのくせに、装備は前のデータから引き継いでいるのか。

「といわれても、わたしは産まれて20年分の記憶しか無いよ。しがない一般人としての記憶しか。」

全知全能の魔王としての記憶なんかあったら、大学受験失敗どころの挫折じゃなかっただろう。確実に、人生のほとんどを病院で過ごしていたはずだ。

「20年？一般人？」

不思議そうに聞いてくるエロ美人に身の上を説明する。本屋での一言、落下、いまの現状。離せば離す程、エロ美人の顔が引きつってくる。引きつったらさすがにちよつと顔が崩れている。それでも十分きれいだが、ちよつと面白い。

「では、魔王陛下は人間だとおっしゃられるんですか？」

「はい。つていうか、人間以外のものになったことはありません。」

確かに、なぜか今はこんな人間離れた美少女だが、一応は人間のはずだ。多分。しかし、エロ美人は少し固い声で断言する。

「なぜ記憶が無いのかは分かりませんが、魔王陛下は人間などではありません。現に、圧倒される程の魔力をお持ちですし、魂も人間ではあり得ない美しい闇色をしていらつしゃいます。」

え、わたしいつのまにか人間やめてたの？



## 日本人はNOと言えない（後書き）

長い、ですかね。話の区切りがうまくいかないんです。途中でぶつたぎるのは嫌だし……。うう、精進します。

## 日本人はNOと言えない

エロ美人からの衝撃告白に、わたしはしばし固まっていた。猫さんはどうしよう、どうしようかと慌てて、エロ美人はなにか考えるように宙を見ている。・・・なぜだろう、猫さんたちが可愛すぎるのはいいとして、ただ宙を見ているだけの男がやたらと美しく見えてしまう。くそ、美人なんて嫌いだ。

「ふむ。魂のことはわたしにはわかりかねます。エリザを呼びましょう。」

考えていたわりには、あっさり人に頼ることにしたらしいエロ美人は、くるつとこちらを向き、恭しく礼をとる。

「申し遅れましたが、魔界第三公が一人、淫魔のディーラともうします。魔王様の忠実な下僕として、仕えてゆきますので、どうぞこの身をお心においてくださるよう、お願い申し上げます。」

淫魔なんて似合い過ぎだろう、と吹き出しそうになったが、こんな丁寧にな乗られて笑い出すのはさすがに礼儀がなさすぎるだろう。プチ引きこもりと言えど、押さえるところは押さえているのだ。

「えっと、ご丁寧にも。わたしは・・・わたしは。」

くつとのどに何かが引っかかったように言葉が出ない。名前を言ううと思ったのに、言葉が出ないのだ。おかしい、さっきまで自分の名前があったはずなのに。なにも、思い出せない。

「ああ、魔王陛下は名前が存在しないのですよ。・・・本当に、何も覚えてらっしゃらないんですね。」

「名前が無いって、どうして？」

「縛られるからですよ。ひとつの魂に複数の名前があれば、それだけ個が強くなり魂が疲弊してしまう。だから、名はないのです。」

そんな、とつぶやく。名前が無いことが、こんなに不安なこととは思わなかった。

「愛称、くらいなら大丈夫かもしれませんが。いままで、魔王陛下は魔王陛下でしたので、名前のことなど考えたこともありませんね。」

工口美人は不思議そうにこちらを見ている。いままでがそうだとし  
ても、一般人の身からすれば常に陛下やら魔王陛下なんてよばれたら病んでしまう。引きこもりは心が弱いのだ。

「えっと、わたし陛下はちょっと・・・。」

控えめにしか拒絶できないのは日本人の血が流れているからだろう。そうですね、となにやら考えこむ工口美人は、少しの間固まっていたかと思うと、突然いままで一番の笑顔で今まで一番の爆弾を落とした。

「では、ローズ様などどうでしょう。陛下の御髪と同じ色の花弁が美しい、魔界でしか見られぬ希少な花でございます。」

ろーず、ろおず、ろおおずう!!??

はつきり言つて、背中がかゆすぎる。こんなにむずがゆい思いをしたのは、高校１年生のとき英語の授業でジェニファーという英名をつけられたとき以来だ。

しかし、ぴったりですわとはしゃぐ猫さんや、最高の名前でしょうと言わんばかりにここにこしているエロ美人、もといディーラさんを前に嫌だとも言えず。ここでも日本人としての血、NOが言えないという性分を發揮してしまい、わたしは魔王様、姫様、そしてローズ様という非常に恥ずかしい名前を得てしまったのでした。

## 日本人はNOと言えない（後書き）

ジェニファーは実話です。会話を尽くり、お互いにしゃべるとい  
う授業で、私の相手は確かケビンとかそんな感じだったと思います。  
昔のことですが、鮮明に覚えている程度には恥ずかしかったです。

## 魂の記憶

世にも恥ずかしい名前をいただいて、もだえている間に、ディーラさんは颯爽と部屋を出て行った。なんでも、魂に詳しい人と呼んできてくれるらしいのだ。

わたしのほうから行くよと言ったら、いま出歩くのは危ないのでおやめくださいと断られてしまった。まさか、わたしは先代と同じ悪食だと思われるんだろうか。恐怖の魔王的な！？

「わたしは、二足歩行で言葉を話してる生き物を食べようなんて思わないってば……。」

「あ、とため息をつくとき、猫さん達がどうしましょ、どうしましょと困っていた。くそ、かわいいな。ぱたぱたと部屋を出たかと思ったら、猫さんは三人で飲み物をのせたカートを持ってきてくれた。お茶と、軽くつまめるお菓子だ。」

「こちら、精神を安定させる効能があります。サーという葉のお茶でございます。」

カップに注がれるお茶は鮮やかな紅色だ。紅茶よりも、少し赤みが強い。そして、香りは甘い。

「焼き菓子には旬のイチゴを練り込んであります。」

ほんのりピンク色のクッキーは、固めだけど甘くておいしい。猫さんたちにかこまれて、私はソファにだらしなくもたれかかって、おいしいお茶とお菓子を楽しんでいた。ここで初めて、自分が黒い

ワンピースに着替えている事に気がつく。誰かが着替えさせてくれたんだろうけど、いままで気がつかなかったことがおかしくて笑ってしまう。どうやら、かなりパニックになっていたようだ。

デイーラさんが部屋を出てから、お茶を一杯飲むくらいの時間が経って、ばたばたと人が部屋に近づいてくる気配がした。わたしは、その頃にはすっかり落ち着きを取り戻していて、乱れたワンピースの裾を戻し、きちんとソファにすわる。

お客様を迎えるのに、だらしない格好は良くないのだ。

「魔王様ああああ！！！」

バーンとドアを開け、なにかがわたしに飛びついてくる。体を引こうとした瞬間、飛びついてきた何かがぐんと止まる。どうやら、デイーラさんが止めてくれたらしい。

「エリザ、落ち着きなさい。」

「あああ、魔王さまあ。」

デイーラさんが首をつかんでいるのは、猫目のきつめ美人だった。心なしかサイドの猫さんがそわそわしているけど、もしかして、知り合いですか？

エリザさんは、ちょっといただけない表情ではあはあ悩ましげな息を吐いている。舐めるような視線の先にはわたしがいて、非常にいたたまれない。

「あの？」

うかがうようにデイーラさんを見ると、はあとため息をはき、つかんでいるエリザさんを床に捨てる。

「驚かせて申し訳ありません。これが魂を見る事に長けているのでつれてきましたが、ご不快なら回収します。」

そんなつとすがりつく美人さんをめんどくさそうに足でどかす姿は、なんだか危ない光景だ。

「い、いえ。びっくりはしましたが、大丈夫です。あの、その人は何がわかるんですか？」

しゅたつと立ち上がり、エリザさんはにつこりと営業スマイルを浮かべる。その様子をめんどくさそうにディーラさんが横目で見て、またため息をつく。どうやら、この二人はあまり仲が良くないらしい。

「あたしは猫を統べるもの、その子達の親のようなもの。あたしたちはすぐ眼と耳がいいの。だから、魔王様の魂がどこから来たのかわかるのよう。」

にんまりと笑う顔は確かに、猫を思わせる。

「えっと、もしどこから来たかわかれば、わたしが魔王じゃないってこともわかりますか？」

「わかりません。」

即答、髪の毛を挟む隙間もないほどの即答がかえってきた。思わず固まってしまうくらい、清々しい返答に、ディーラさんがにやにやしている。どうやら、わたしの悪あがきを見て笑っているらしい。



「だってこんなにきれいな魂で魔王様じゃないなんてありえないもの。少しだけ、不思議な音が聞こえるけど、これはきっと・・・。」

つつつとエリザさんがわたしのそばに寄ってくる、そしてくつとあごを持ち上げられ、幼い子どもの熱を測るように、額と額をくつつけられた。

もちろん羞恥はあるが、エリザさんがまじめな顔をしているのに、恥ずかしいからやめてくださいとも言えず、ひたすら眼を閉じて固まる。

「うーん、そうだね。これは、ちょっと、うーん。」

エリザさんは何か悩んでいるらしい。ぐつと額を押し付けられたかと思うと、ぱつと突然離された。目の前には難しい顔をしたエリザさん、そして怪訝そうにこちらを見ているディーラさんがいた。

「どうした、エリザ。」

訪ねられて、また少し難しい顔をして、ふうつとため息をつく。

「前魔王、覚えてるよね。あのハチャメチャ女。」

「あ、ああ。」

「あいつが、死ぬ間際にどうしてももう一回魔王になりたいからって魂に呪を施した。それが魂にひどく傷を付けていて、その傷をいやすために魂は魔界を離れていたんだ。」

どうやらすごく衝撃的な話だったみたいで、ディーラさんは眼を見開いている。いつの間にか猫さんたちは部屋から出てしまっており、

ここにはわたしとエリザさんとディーラさんしかない。

「そして魂はよりどころを見つけた。違う世界の、女の体。そこで傷をいやして、戻ってきた。・・・よりどころの意識をそのまま巻き込んで。」

「それって!」

思わず立ち上がってしまう。突拍子もない話で人ごとのように聞いていたけれど、いきなりわたしの話になったじゃないか。

エリザさんはかりかりと頬をかく。この様子では、まだなにかあるらしい。

「魂の傷はだいたい癒えてる。魔力も先代とは比べ物にならないくらいあがつてる。・・・ただ、あの女の気配もあるから、呪が解ける訳ではないみたい。」

「つまり?」

先を促せば、エリザさんはゆっくりと眼を泳がす。

「ええっと、気をつけないと、先代の魔王に意識を乗っ取られるかもねってこと。」

「はぁあああああ!!?」

魂の記憶はその呪のせいで封じられていて、もし記憶を呼び覚ますものなら一緒に呪が発動してしまうらしい。いまのところは大丈夫だけど、時間が経ったらわからない。つまり、時限爆弾を抱えているようなものだ。

あまりの展開に何もかも考えるのがめんどくさくなり、猫さんに言  
ってお酒を盛ってきてもらい、一瓶あおって、わたしはふて寝する  
事にした。

寝過ぎだなんて思わない、子どもは寝る事が仕事だからね！

## 魂の記憶（後書き）

なんか、書き終えて見直すと、ここまでで主人公寝過ぎですよね。  
いや、私自身が寝るのが趣味なので、つついっ・っ・っ。

## 勉強と日常

魔界とやら来てから1週間。いまのところ精神がのつとられたり、コウモリみたいな羽が生えるという事態は起きていない。怖い美少女のままだ。

わたしはいまだ軟禁状態で、部屋から出してもらえない。寝室と、おもてなしをする部屋とバスルームがわたしの行動範囲。せっかくここが魔界だということに納得したのに、どこにも行かせてもらえず、退屈きわまりない。

暇すぎるので、昨日ディーラさんに紹介された三公たちの名前を反復してみる。

ひとりのはあの男前、ラズさんだ。なんでも、本性はおおきなオオカミらしい。だから、あの犬もどきを止めることが出来たんだとか。

もうひとりは女の人、魔界の女というところすごくセクシーな気がするが、このお姉さんは非常に清楚というか、なんというか、そう天使みたいな人でした。アラナさんというらしいんだけど、精霊なんだって。でも、普通の精霊じゃなくて、禁忌を犯して魔界に落ちた精霊らしい。

そして、ディーラさん。

この三人がいまのところ魔界を取り仕切っているらしい。ラズさんは獣たち、おもに肉食の魔物担当して。アラナさんは精霊やなんと幽霊や腐った死体など、結構ホラーな部門担当。そして、ディーラさんは人型の魔物、もしくは人の生気をすって生きている魔物担当。ちなみに、こないだ魂をみてくれたエリザさんは、ラズさんの管轄らしいけど、能力が特殊だからディーラさんも面倒を見ているらし

い。

そして、こうして暇しているわたしの役目は、魔界全土にらみを利かせて、統一することらしい。なんでも、前魔王がものすごい恐怖政治だったせいで、基本的に魔王は嫌われつつ恐れられているので、そこにつけいれば統一なんてすぐですよ、とアラナさんが楽しそうに言っていた。

うん、見た目は天使なんだけどなあ。

「統一なんて無理だよなあ。わたし引きこもりだし、もうそろそろゲーム禁断症状が出るし。」

ふわふわのソファに寝転がって、身体を揺する。

三公はいろいろ忙しいらしく、あまり部屋へ訪れることは無い。日がなごろごろするのもあれなので、本を持ってきてくれるようお願いしたら、魔界に本は存在しないんだという。そんなものの必要性が無いんだって。

文字は、せいぜい手紙を書くときに見るくらいで、あとは接することとは無いらしい。不便は無いのかと聞いたら、物語が見たくなれば人の夢に潜り込んでみるんだって。映画を見る感覚かなあ。

本も無く、猫さんたちもおしゃべりの相手にはならず、お茶とお菓子もそんなにいらないし、寝ると言っても限度がある。はじめの数は大きなお風呂で遊んだり、無限にある衣装でファッションショーをしたりしていたのだが、そろそろネタも尽きた。

「うーん、あとは・・・どつきどき脱走計画しか無いかな、やっぱ。」

引きこもりは、ゲームとパソコンがあってこそその引きこもりなのだ。

なにもなくて引き込めるのはよほど外界と関わるのが嫌なタイプだろう。わたしは人付き合いよりもゲームが好きだっただけで、アクティブに動くことも出来るのだ。

「その扉には猫さんたちがいるし・・・。」

わたしが猫好きだとディーラさんにばれてからは、扉前の護衛も猫さんだ。わたしの腰程の背丈の茶虎が二匹、鎧を着て、槍を持っている姿は鼻血ものだった。

「となれば、やっぱシーツロープで窓から脱走かな？」

ここは二階で、下は庭園なのは確認済みだ。あとは、部屋にお茶を持ってくる猫さんをどうごまかすか。

空を見れば、太陽はまだ真上にも来ていない。ということは、お茶の時間はもう少し先だろう。さっさとシーツをつなげば、十分脱走するだけの時間はある。

「そうとなれば、さっそく実行！」

## 勉強と日常（後書き）

ちよつと短めですね。主人公、引きこもりのわりに引きこもるの嫌いになってる。いや、でも、何も無いところに引きこもるのは難しいですね？



## 勉強と日常

真つ白なベッドシーツをしわくちやにするのは少し良心がとがめたけれど、出来上がったシーツロープを窓からたらす頃には罪悪感なんて消え去っていた。

天涯付きベッドの柱へしっかりとシーツを結び、窓の外へたらす。

「よつし、いくぞ！」

頭の中には、レスキュー隊の下降訓練がビジョンとしてあったが、あんなことしたら摩擦で手が焼けただれてしまうため、じりじりとおりにすることにする。

窓からゆっくり身体を出して、シーツロープをつかみ、ぶらさがって初めて自分の計画の杜撰さに気がついた。ロープの長さが足りていないのだ。しかし、中途半端にぶら下がってる今、上へあがる程わたしの腕に筋肉は無かった。

「ちょ、まつ、て・・・。」

両腕のみで自分の体重を支えるというのは、想像以上に重労働で、まったく下へ進めない。進んだとしても長さが足りていないのだが、ここから落ちるよりは、もう少し下から落ちる方が怪我は軽いだろ  
うが、動けない。

「お、ち、・・・るううつうつ!!」

こらえられたのはわずか数秒、お腹の中心が浮き上がるような不快感のあと、わたしは真逆さまに落ちてしまった。

遅いくる衝撃にそなえ、身体を丸め、歯を食いしばる。

「いた、い。いたい・・・、痛くない？」

いつまでたっても衝撃はこず、痛みも襲って来ない。どうしてなのかと目を開ければ、目の前にはいつぞやの犬もどき。わたしはどうやら、犬もどきの上に落ちたらしい。

なあに？と訪ねてくるような視線は可愛らしいが、やはり体格差があると恐怖しか覚えない。

「は、はろ〜？」

万国共通の挨拶は犬にも有効らしく、アオーンと遠吠えで返事をくれた。おお、コミュニケーション！と喜んでいると、なんだか後ろの建物が騒がしくなって来た。すぐ頭上の部屋から、逃げた！？姫様いない！！と猫さんたちの悲鳴が聞こえます。

「くそ、密告とは卑怯なり！」

もっふもふの毛皮は恋しいが、ここは逃げるに限るだろう。長い髪の毛を片手で掴み、ワンピースの裾をさばきながら庭園のすみへと走る。

美しい花々を眺められないのは悲しいが、いまはどこかに隠れるのが先だろう。

ぱたぱたと迷路のような庭園を走っていると、突然開けた場所に出た。そこには2人の男性がいて、どうやらお茶会を開いていたらしい。

「う、ごめんなさいっ！！」

すぐに元来た道を帰ろうとしたら、通って来たはずの道がなくなっていた。

「道がない？」

呆然と花が生い茂る生け垣を見てみると、後ろの男の人から声をかけられた。

「お嬢さんはこの庭園は初めてかな？」

劣化デューラさんというのがしつくりくるだろう男の人は、ぶさいくではないけど映画だったらまずはじめに殺されそうな顔だ、という失礼な感想は心の中に閉まって。初めてかという問いには素直に頷いておいた。あの部屋から出たのが初めてなので、外のものは全て初めてだ。

「ここは迷いの庭。一度入ったら容易くは出られない。」

もう一人の男の人は、面長な顔に細い目で、ちよつと蛇っぽい。どちらも、なんだかうさんくさい空気満点だが、ここは魔界。普通の人間なんているはずが無いので、多少うさんくさいのは仕方ないだろう。

「どうすれば出られるんですか？」

「そうだねえ。」

「例えば、この庭園のご機嫌をとればいい。」

男性二人はあくまでマイペースだ。ゆつくりとお茶をすすり、お菓

子をつまむ。

「あの、わたしあまり時間がないんです。どうしたらご機嫌とれるのか教えてもらえませんか？」

テーブルの近くまで行くと、二人は何が楽しいのか笑っている。二人の近くは香水なのか、甘い香りが立ちこめていた。ちょっとむせそうになりながら、さらに二人のそばへ行くと、突然足首になにかが絡み付く。

「ご機嫌はねえ。」

「君の身体でとれば良いんだよ。」

ぐんつと足を引っ張られ、逆さまにつり上げられる。ぎゃああああと少女らしからぬ叫びをあげてしまったのは許してほしい、咄嗟にきやあっなんて叫べる女なんていないのだ。

「ちょっと、なにこれっ！！」

自分の足に絡み付いているのは細いツルで、ちくちくとむずがゆいのはきつとツルに棘があるんだろう。めくれ上がるワンピースを必死に押さえながら、助けを呼ぶ。

「助けてくださーいっ。変態が、変態がいますー！！」

少女を吊るし上げて、それを鑑賞しつつお茶飲んでるんだから変態で間違いは無いだろう。なんとかツルが外れないかと身体を揺すっていたら、さらにたくさんツルが身体に巻き付いて来た。

「暴れても無駄だよ、そのツルは切れないからね。それに、」

「暴れれば暴れる程、強く絡み、血が流れていく。」

恍惚とした表情を浮かべる変態二名はゆったりとした足取りで、こちらに近づいてくる。ツルは依然として、少しちくちくするだけなので害はないが、目の前の変態たちは精神的に非常に害がある。

「来ないでー！！！」

とにかく、ツルを取り払い、こいつらから離れたい、そう強く思った瞬間、ぶわっと身体の奥から何かがはじけ、真っ黒な炎がわたしを中心に燃え上がった。

変態二人はおおっとかなんとっと言っているけど、そんなの無視だ。

「ぎゃああああ、燃えてるううう！！！」

パニックになりながら暴れていると、その炎が全く熱くないことに気がついた。それどころか、足のツルだけ焼き切って、しかも庭を焼いて道をつくってくれている。逃げるなら、いましかない。

「あっ！」

「待ちなさい！」

「待てって言われて待つやつがいるわけないでしょっ。」

ここへ来たときと同じように、髪の毛を掴み、スカートをたくし上げ、出来上がった道を駆け抜ける。後ろから何かが追って来ている

ような気配もしたけれど、ざばつと庭を突っ切ってしまったら、後の気配もなくなった。

「はあ、はあ……。怖かった。まさか庭に変態がいるなんて……」

ぜいぜいと肩で息をして、その場に座り込む。どこの世界にも変態はいるんだな、と悲しい共通点に心を痛めていると、庭の無効から憤怒の表情のラズさんが猛然と走って来ているのが見えた。

そこを動くな、と顔が言っているので、立ち上がりかけた身体にストップをかける。

どうやら、どこの世界でもお説教というやつはあるらしい。もう一つ見つかった悲しい共通点は完璧に自業自得なので、どこからも助けは入らなかった。

## 勉強と日常

ラズのお説教により、非常に不機嫌なわたしを猫さんとディーラさんがなだめる。ラズさんは、皆さんに心配かけたんだから謝らないといけませんよ。なんてまるでお母さんみたいなことを言っていたけど、わたしは謝る気なんて無い。

・・・いや、泣きそうになってた猫さんには謝ったけどさ。・・・ご無事でよかったって抱きついて来たアラナさんにも謝ったけどさつ。

「ローズ様、今後このようなことはしないでくださいね。私たちは心配で胸がつぶれる思いだったんですよ？」

「・・・ごめんなさい。」

結局ディーラさんにも謝ったけどさ！

退屈だったんだもん、というのはさっきラズさんに言って散々怒られたから言わない。きちんと約束は守らないといけない、っていうのから始まって、信頼を裏切る王はよくない王なのだっていうラズさんの熱弁にわたしは、やはりごめんなさいとしか言えなかったのだ。

「退屈なのはわかっていますが、いま外に出られるのは危険なのです。時期がくれば、きちんと外でもどこへでも出られるので、もうしばらく我慢をしていただけないでしょうか？」

困ったように笑うディーラさん、ディーラさんの後ろで苦虫をかみつぶしたようなラズさん。ここにはいないけど、アラナさんも、すごく心配をしていたようだった。

確かに、窓から脱走したのはやり過ぎだったと思うけど、にしてもみんな心配し過ぎじゃないかな。

「外って、庭の変態みたいな人がいるから危ないわけ？」

過保護とまで言える彼らの行動は、もしかしたらあの変態たちから私を守るためだったのかもしれない。そうだったらやっぱり素直にもう一回謝った方が良くないかな、と考えていると、目の前のディーラさんに勢いよく肩をつかまれた。

「ロ、ローズ様。あいつらに会ったのですか、どこか、ああご無事ですか!？」

「ぶ、無事だよ、どこも怪我してないし。なに、あいつらやっぱ危険なの？」

ディーラさんのあまりの取り乱しようにちょっと引いてしまった。髪の毛を振り乱して、わたしのローズ様が汚れたとか意味の分からないことを叫んでいる。貴公子キャラだと思っていたのに、ちょっと裏切られた気分だ。

「あの兄弟とあつて無事なのものは少ないので、ディーラは取り乱しているんですよ。」

男前爽やかキャラからおかんキャラへと私の中で進化したラズさんは、眉間にしわをよせている。これは、またわたしが脱走したことにいらついてきた顔だ。けっこうしつこいんだもんなあ。

「無事って、ちょっとツルがちくちくしただけで、別に何もされていないよ。焼いて逃げたし。」



「「焼いて逃げた？」」

麗しい二人組のきよとした顔はなんだかおかしくて、笑いそうになるのをこらえながら話を続ける。

「庭の機嫌をとれと言つて、逆さ吊りにされてさあ。やばいって思つたら炎が出て来て、ツルと庭木を焼いて逃げたの。・・・あ、もしかして庭木焼いたのがマズかった？」

だんだん険しい顔になる二人に、言葉が尻すぼみになっていく。よく考えれば、庭を破壊して逃げて来たのはまずいだろう。しかし、変態に襲われていたのだ、多少のことは許してもらいたい。

「さすが魔王様というか、そうですね。・・・ラズ、外出禁止を解いても平気なんじゃないか？」

呆れ半分、驚き半分といったディーラさんはわたしにとって非常に嬉しい提案をラズさんにしてくれる。期待を込めたまなざしでラズさんを見ると、爽やかな顔がものすごいしかめっつらになっていた。出会ったときに爽やかさは嘘だったのかってくらい、しかめっつらだ。

「確かに、あの兄弟から逃れられるのなら大丈夫でしょうが・・・。そうですね、城の中ならば。」

やった！と小さくガッツポーズをしたら、ラズさんにがしつと頭を掴まれた。

「た、だ、し。決して一人にならないこと、走らないこと、知らな

い人にはついていけないこと。いいですね？」

につこりと笑顔は爽やかだが、言っている内容はやはりおかんだ。確かに、わたしはここに産まれたのは1週間前だけど、一応成人した女性だ。くどくどと言われても、めんどくさいなあとは思わない。

「わかったよ。おっけい、まかせてー。」

やる気のない返事はラズさんのお気に召さなかったようで、返事は「はい」でいいんです。と怒られてしまった。もう、めんどくさいやつめ。

わたしも、このときはラズの忠告はめんどくさいものとは思っていなかった。この後、もうちょっと話聞いとけばよかったと反省するのは、また少し先の話である。

## 勉強と日常（後書き）

あれ、こんなキャラにする予定じゃなかったのに。早くも主要キャラ2名が壊れてきました。おかんって……。爽やかくんになる予定だったのに。

後悔はあとからするから、後悔。でしたね

ようやく外出禁止令も解かれ、わたしは晴れて自由の身となった。といっても、まだ自由なのは城の中だけで、外に出られる訳ではないのだけど、軟禁生活に比べたらずっと自由な生活ではある。

「さ、今日はどこに行こうかな。」

そして、わたしは4日目になる城探索へ出かけた。

城は思っていた程大きくは無かったけれど、わたしの身体も思っていた以上に小さくなっていたので、回るのに時間がかかる。しかも午前中は自由だが午後はラズさんにより魔界の歴史とか、王様になるために必要な知識やらマナーやと言った授業があるので、自由といっても限りがある。

なので、猫さんたちとの相談の結果、城内を4つのブロックに分けて探索することになったのだ。今日が探索最終日で、行く場所は東の塔、書庫や文官たちが働くスペースがあるらしい。

「文系ゾーンか。懐かしいなあ、小説読みたい……。」

ゲームやネットに浸かりきった生活だったが、それなりに読書もしていた。ライトノベルも好きだったが、普通の小説もたくさん読んだ。とにかく、別の世界に浸るのが好きだったんだ。

「猫さん、借りられる本ってあるかな？」

「いえ、あちらは資料倉庫となっておりますので、姫様のおっしゃるようなものはないかと……。」

「そっか、残念。」

かかとの低い靴は足音があまりしない。皮で出来ているらしい黒い靴は、なぜか足にぴったりで靴擦れも起こさない。猫さんたちは、当然だが裸足だ。メイド服は城の雰囲気に合わせて着ているだけらしく、本当は必要ないのとか。なので、すぐ後ろから誰かが近づけば足音ですぐに分かる。

「「「姫様！」」」

猫さんのひとりにかばわれ、もう二人がわたしの前に立つ。何が起きたか分からず固まっていると、前に立った猫さんが吹き飛ばされる。

びくりと身体を揺らすと、わたしを押さえている猫さんもゆっくりと倒れてしまった。

「な、ちよつと。大丈夫!？」

猫さんたちはみんな外傷はない。なのに、ひどく苦しそうな顔で倒れている。パニックになりそうな頭をふり、とにかく助けを呼ぼうと前を向くと覆面をかぶった黒ずくめの男性が四人、廊下を塞ぐように立っていた。

「・・・あなたたち、なんなんですか。」

震えそうになるを押さえて、猫さんたちをかばうように前へ出る。異様な空気を醸し出しているこの男たちは、決して好意的な人物ではないはずだ。

いけません、と消え入りそうな声で猫さんたちがわたしを止める。でも、この状況で猫さんたちを見捨てたら、なにかを失ってしまう

ような気がする。怖くて身体も声も震えるけれど、ここは動けるわ  
たしが猫さんを助けれないといけないところだ。そのために、なけ  
なしの根性を絞り出そうじゃないか。

「ふん、猫族をかばうか。今度の魔王は慈善家らしいな。」

先頭の男がぐもった声で馬鹿にしたように吐き捨てる。からんと  
乾いた音と共に枯れ木が投げられ、その木に火をはなつ。むっと甘  
い香りはねっとりと身体をなでてくるようで、ぐっと息が詰まる。  
猫さんたちはこの匂いがひどく辛いようで、なんとかわたしのスカ  
ートの裾を握っていた手が滑り落ちてしまった。

「これ、なに。甘い・・・香り。」

「ラターニヤの香木も知らないということは、三公たちは本当に何  
も教えない気らしい。」

「傀儡にでもする気だったんだろう。」

男たちはゆっくりとした足取りでわたしに近づいてくる。猫さんた  
ちを背に庇い、ぐっと睨みつけ、助けを呼ぼうと口を開く。しかし、  
わたしの口から出たのは助けを呼ぶ声ではなく、すきま風のような  
空気だけだった。

ぱつと首を押さえるが、異常はない。しかし、どんなに声を出そう  
としても声が出ない。焦って大きく息を吸い込むと、今度は手足が  
強くしびれてくる。

「この甘い香りには獣族たちを酔わせるのと同時に、強い麻酔作用  
もあるのさ。」

「声も出ないし、身体も動かない。そろそろ意識もぼんやりとしてくるだろう。」

「さて、さっさとずらかるぞ。」

ぐらりと揺れた身体をすくわれ、白い袋へ入れられる。身体に全く力が入らないので、抵抗らしい抵抗も出来ない。

ざわりとしな何かが体内を巡るが、それは外ではなく中へじわりじわりとたまっていくようだった。

白い袋の内側をぼんやりと眺めながら、口うるさいラズさんを思い出す。またお説教だろうなと思うと憂鬱だが、あれも心配してくれるの行動なんだろう。

あーあ、もうちょっと話聞いとけばよかった。と後悔するも後の祭り、どうやらわたしは相当注意が足りないらしい。

後悔はあとからって、ついこないだ思ったのにな。

そこでわたしの意識は途切れた。

後悔はあとからするから、後悔。でしたね（後書き）

久々掲載で、短いしぶったぎり。ごめんなさい、指先の皮膚が湿疹とあかぎれと乾燥でぼろぼろでキーが打てないんです。精一杯なんです。よくなったら、一気にあげるので、それまでお待ちください・・。



## 疑惑と誘拐

白い袋に入れられて、揺れて揺られて、わたしの気分は最悪だ。多分空を飛んでいたんだと思う、かすかに感じる空気の動きと、移動の雰囲気からして馬車や馬は使っていない。なにより、ここは魔界だ。移動方法が空を飛んでもおかしくはない。

ようやく白い袋から出されたときには、わたしはぐったりして立ち上がることも出来なかった。もともとそんなに乗り物に強い訳じゃないのだ。空を飛ぶというのが、三半規管に非常に悪影響だということを知ってしまった。少し懂れていたのに、夢が壊れてしまった。

「おい、起きろ。」

ぐつと髪の毛を引っ張られ、無理矢理顔を上げさせられる。頭皮が引き攣る痛みで涙がにじみ、誰かに暴力を振るわれている現状に恐怖で身体がすくんでしまう。ひ弱な引きこもりだったわたしは口喧嘩もまともにしたことが無いのだ。喘ぐように口から空気を吐き出せば、ぱんつと頬を殴られた。

「っー」

痛みと衝撃で気分の悪さが吹き飛んでいく。しかし今度は恐怖で立ち上がれない。

「……ずいぶん弱い。」

「本当にお前は魔王なのか？」

周りの覆面たちがざわざわしている。もしかして、先代の魔王みた

いな姿を想像していたのだろうか。極悪で、誰も逆らうことの出来ない、無慈悲な魔王。そんなものを想像していたのなら、戸惑うだろう。こっちは少し叩かれただけでビビりまくっている少女だ。ちよつと怖い美少女だけど、見た目は弱い少女だ。

恐怖ですくみ上がっている身体とは別に、頭の中では冷静に周りを分析しているわたしがいる。どうやら、覆面たちは冷血、無慈悲という人物たちではないらしい。だからこそ、自分たちの思い描いていた魔王とあまりにも違うわたしを見て戸惑っているのだ。ならば、この作戦しか無いだろう。

「あ、の。わたし魔王様なんかじゃありません。」

さつき叩かれたせいで口が切れ、しゃべると非常に痛い。しかし、痛みで顔を顰めている表情が男たちに罪悪感を植え付けているのだろう、戸惑う空気がだんだん大きくなってくる。

「わたしはお城に遊びに来ただけです。お城に、返してください。」

なるべく高く、か細い声を意識して、わたしすぐくおびえていますよとアピールする。話が違う、とか、お前のせいだろ、と男たちがこぼす声が聞こえてくる。効果は上々だ。

「ラター様に聞いてくる。お前から見張つとけよ。」

四人の中の一人が部屋を出て行く。ラター様が誰なのかは知らないけれど、どうやら男たちは実行犯で、黒幕は別にいたらしい。一人減って、部屋には三人だ。六畳程の部屋は多分倉庫かなにかなんだろう。窓は無く、木箱がいくつか転がっている。ドアは男たちの後ろ。脱出するならあそこしかない。

「くそ、俺ははじめから怪しい話だと思っただ。」

「おい、あんまり言うなよ。しかたないだろ、前金受け取っちゃったんだから。」

男たちの空気が悪くなる。ゆっくりと視線を巡らせるが、わたしに注意を払っているのは右隅の男だけで、あとの二人はぶつぶつと文句を言い合っていてわたしのことは全く見ていない。

気分悪いです、と体全体で主張しながら、起き上がる。相変わらず二人はこっちを見ていない、右隅の男も二人の言い合いを見ている。ぐつと足に力を入れる、まだ魔力の使い方は教えてもらっていないけれど、多分いける。これが魔王の記憶なのかどうかは知らないけれど、感覚的に魔力の使い方が分かるのだ。

そう、魔力は

『発動する魔法を頭に思い描いて、必要な量だけ魔力を放つ。血液よりも濃い、わたしたちの力を意識すれば、不可能なことなんて無い。』

それは一瞬の出来事だった。全身に魔力をまとうて、ものすごい勢いで扉をぶち破ったのだ。魔力で強化した足は、人間からかけ離れたスピードを出すことが出来る。そして、魔力で強化した身体は岩をだっただけくらい硬い。

「うわっ!!」

「くそ、やっぱりあいつが魔王だったんだっ。」

「追っぞ!」

後ろで男の人たちが叫んでいるのは分かったけど、ここで捕まるわけにはいけないので、そのままの勢いで廊下の壁をぶち破る。どうやらここは三階か四階だったらしい、突然足場がなくなるが、わたしに焦りは無い。

『空を飛ぶには、飛ぶ媒体をイメージして。それを魔力で具現化するの。』

わたしにとって空を飛ぶというのは、大きな翼だ。身体の魔力を肩甲骨あたりに集結させる。ばさりと羽ばたいたのは、真っ黒な翼。大きな翼を動かして、上へ飛ぶ。

「わたしを捕まえようなんて、本当に何様なのかしらね。殺しちゃおうかしらあ？」

気分が高揚して、すごく気分がいい。圧倒的な力を自分が手にしているのがわかる。身体の中で渦巻く力は誰よりも強く、純粋な力だ。この力の前では、誰もが跪く。そう、わたしが最強……

「ちょっと、待って……。いや、え。殺すって、何を。」

そんな、ダメだ。殺すなんてできない。わたしは一般市民であつて、いや、魔王かもしれないけど。でも、殺すなんて、そんな……

『だってわたしが一番強いよ。だから何をしても良いの。あたりまえじゃない。幽閉なんて嫌でしょ？わたしも嫌。あいつらのそばにいたら、ずっと閉じ込められるわよ？』

「え……。」

頭の中で、ひどく甘い声がする。女の人の声。

『あの屋敷からは魔力を封じる結界の気配がする。あなたを閉じ込めてしまう気なんだわ。』

見下ろせば、たくさんの男の人がいる。弓矢や魔法を放って、わたしを落とそうとしているのだ。でも、その攻撃はわたしにはあたらない。大きな魔力をまとっているから、誰もわたしに触れることは出来ない。

『永久の闇に閉じ込められたら、さすがのわたしも出られない。』

「そ、そんな。どうしたらいいの!？」

『閉じ込められる前に、みんな壊しちゃえば良いのよ。ほら、急がないと結界発動しちゃうわよ。』

ゆっくりと視線を向ければ、いつのまにか下におおきな黒い切れ目のようなものが出来ている。おじさんがひとりに、白いローブを着た人が三人でなにか術を発動させようとしているのだ。

『まだ、死にたくないでしょう?』

ぐあつと黒い切れ目から大きな手が現れる。あれに捕まれば、逃げられない。恐怖に感情が振り切れる。手のひらに魔力を集め、下の大きな手とそれを発動しているおじさんたちへ黒い炎を叩き付ける。この前の庭を焼いた炎とは違う、殺傷能力のある炎。

耳を塞ぎたくなるような絶叫があがる。身をよじり、炎から逃げようとしているが、炎は収まらない。だって、わたしは殺す気で炎を放ったのだから、あの炎はおじさんたちを殺すまで決して消えない

のだ。

『よくできました。』

甘い声が頭の中をなでていく。ゆっくりと地上に降りれば、いつのまにかたくさんいた男たちはどこかに逃げてしまっていた。屋敷の庭には動かなくなった固まりが四つに、恐怖で動けない者が何人か残っていた。

呆然とその光景を見ていると。大きな手のひらに目を塞がれた。とつさに身構えると、そこにはひどく辛そうな顔をしたラズさんがいた。

「迎えにくるのが遅れました。」

「え、あ。・・・うん。」

「あのものはわたしの部下が処理しておきますので、まあ・・・ローズ様は城にお戻りになってください。」

もう一度庭へ視線を向けようとしたら、無理矢理抱きしめられた。

「ラ、ラズさん。痛いよ、離して。」

押しのけようと腕を上げて、ひどく自分の手が震えているのが分かった。そして、震えているのが手だけではなく、全身なのもより強く抱きしめられて気がついた。

「戻りましょう。」

失礼と断られ、わたしはラズさんに抱きかかえられた。いわゆるお

姫様だつこた。

「いまはお眠りください。詳しいお話は、またゆっくりいたします。いまは、眠っていてください。」

多分、魔法を使われたんだと思う。わたしのまぶたは突然おりて来て、意識もあつという間に落ちていく。

『いまはまだ良いわ。ゆっくりおやすみなさい。わたしのかわいい娘。』

意識が落ちる寸前、耳をなでた甘い声は毒をはらんでいることを隠さない。これはよくないものだとか分っているのに、聞かずにはいられない魅力的な声。

それが先代魔王の意識だと気がつく前に、わたしの意識は落ちていった。

## 疑惑と誘拐（後書き）

乾燥になんか負けない！久々更新です。相変わらず大して先を考え  
てないので、どうやって話をつなげようか悩みつつの更新。作者な  
のに、この先が分かりませんというハプニング。きっとキャラクタ  
ーたちが勝手に動いてくれるだろうと任せっぱなしのダメ作者です  
がのんびりとした目で見てやってください。



## 毒と誘惑

目の前には、魅惑的な女性があられもない格好でソファに寝そべっている。わたしと同じ黒い髪の毛に、黒い瞳。ただ、あつちのほうがずっと身体的に大人だ。でることはでて、なのに腰は折れそうに細い。

『ふふ、いらつしゃい。ここはわたしの世界、魂の中のわたしの居場所。』

パチンと指を鳴らせば、小振りの椅子とお茶とお菓子の乗ったテーブルが現れた。

『さあ、食べてちょうだい。ああ、大丈夫よ。毒なんて入ってないから。』

恐る恐る椅子に座り、お茶には手をつけず、目の前の人を見る。わたしと同じようなデザインの黒いワンピースを着ているのに、気怠げに腕を上げて菓子をつまむ姿はむせ返る程色気がある。わたしが怖い美少女なら、この人は傾国の美女というやつだろう。

「あなたが、先代魔王？」

にいつと猫のように笑う女性は、どうやら先代という言葉が気に食わなかったらしい。小振りのお菓子をつまみ、ゆっくりと眺め、そしてこちらに投げてきた。

『先代ってすぐくおばあちゃんになった気分がするわ。でも、あな

たに魔王陛下って呼ばれるのも変よねえ？」

また一つお菓子をとって、今度は自分の口に放り込む。そこで、みんなが言っていた悪食という言葉を出す。こんな細い人が、猫たちを丸呑み・・・？

『そういえばあなたはローズっていう愛称があるのよね。なら、わたしはシアにしましょう。ローズの花の蜜しか吸わない貴重な蝶なの。』

ずっと手を振ると、真っ黒な黒アゲハがひらりと現れた。黒アゲハによく似ているが、よく見れば羽の先端が銀色だ。

『綺麗でしょう。でも毒があるから、危ないのよ。』

ふふふとおかしそうに笑って、蝶を握りつぶしてしまう。

『あなたが三公たちや、城のものからわたしのことをどう聞いているかは知ってるわ。悪食に、極悪非道に、冷血で、・・・もう失礼しちゃうわよね。』

ぎくりと身をすくませれば、同じ色の瞳がついっところらを向く。深紅の唇が弧を描くと、ゆっくり世界が暗くなってくる。

『彼らがわたしに失礼なのは怒っていないわ。でも一つ覚えていてちょうだい、彼らの話には真実と同じ量だけ嘘が混ぜられている。』

「嘘・・・？」

『そう。わたしの嘘、魔界の嘘、全ての真実は無慈悲で残酷で、で

も愛しいの。わたしとあなたは同じ魂、でも産み落としたのはわたし。わたしは嘘はつかないの。あのね、わたしはあなたのことが好きよ。すごく気に入っているの。」

世界の闇はどんどん濃くなり、目の前の女性、・・・シアの姿はどんどん闇に飲み込まれていく。

『わたしの半身、わたしの娘。全てを信じてはダメ、でも疑ってもダメ。誰に利があるか考えなさい。流れを良く見ればおかしなところは見えてくる。』

ことごとく何か落ちる音がする。額に暖かいものが宿り、離れていき、わたしは闇に包まれた。

## 毒と誘惑（後書き）

個人的にセクシーな女性が大好きです。色気は肉と目ですね。ヘアプレーの黒人のおばさまが大好きです。セクシーダイナマイト！

## 引きこもり生活、再び

柔らかいベッドに寝そべり、枕を抱きしめる。頭の中には、自分が焼き殺した固まりと断末魔の悲鳴がぐるぐると回っている。後悔しているかと聞かれたら、答えはNOだ。だって、あそこで躊躇したら殺されていたのはわたしだったのだから。でも、平気なのかと聞かれたら、その答えもNOだ。

どうして誘拐されたのか。どうしてわたしを殺そうと、正確には封印しようとしたのか。いくら聞いてももう少しお待ちくださいと言われてしまう。ラズさんも、ディーラさんも、アラナさんも、猫さんたちも、みんなわたしに真実を教えようとしらない。

結局、また外出禁止になってしまった。まあ、城内で誘拐されたんだから仕方ないけど、じっとしていると悲鳴が聞こえてくるような気がして辛い。

あの一瞬。わたしは全てを壊してしまおうとした。シーラに意識を乗っ取られていたのもあるけれど、わたしの心も「殺せ」と言っていた。

ぎゅうつとシーツを掴む。耳の奥で悲鳴が聞こえる。

「ごめ、ん、なさい。」

何の謝罪かも分からないまま、わたしはただ謝っていた。簡単に奪ってしまった命が怖くて、わたしには事実を受け止めきれなかったんだ。でも謝る先はもうなくて、わたしはシーツをつかんで震えることしか出来なかった。

「ローズ様。」

柔らかな声はディーラさんだ。今の自分を見られたくなくて、シーツの中に潜る。

「昨日の事件以来、水しかお飲みにならないと猫たちに泣きつかれたラズから差し入れです。いま自分は手が離せないので行ってくと押し付けられてしまいました。」

ベッド脇のテーブルに何かを準備している音がする。確かに、誘拐されてもう三食ほど水しかとっていない。いつもご飯三食におやつ三回という食欲おう盛なわたしからすれば異常事態だ。しかし、何をしていても悲鳴が、あの光景が離れなくて、食事どころじゃなかった。

「ディーラさん、ごめん。ちょっと今は・・・。」

「あの者たちは魔王様を封じる計画を立てていたのです。」

静かな声に、思わず声が止まる。

「あれは禁術でして、一度発動すれば術士の命全てを吸い付くし、その魔力で闇を作り、その中に対象物を封じ込めます。一度封じられれば、闇の魔力が枯渇するまで出られません。しかし、魔王様が闇の魔力そのものなので、魔力は枯渇することはありません。魔王様が消えない限りは封印は解けない、という術だったのです。」

シアの言葉を思い出す。永久の闇に封じられれば、魔王でさえ出られない。

「彼らは、魔王様が恐ろしかったのです。またあの悪夢のような時代がくるのなら、いっそ封じてしまえと思ったのでしょうか。」

シーアが死んで、わたしが産まれるまでには数百年の時間があつたはずなのに、まだ恐怖は根深い。シーアが何をしていたのか、わたしはまだ詳しくは知らない、なにが嘘で何が本当なのかも知らないでも、ひとつわかるのは、この城で誘拐をするには内通者がいないと不可能だということだ。

「そっか。前の魔王様怖かったらしいしね。」

シーツの中から返事をする、突然ぐつと抱き寄せられた。あのとき、迎えに来たラズさんと同じ強さで、ディーラさんに抱きしめられる。

「我慢を、しないでください。あなたは先代とは違う。自分を害する者のため心いためるローズ様の優しさにみな感動しています。しかし、わたしは心配なのです。これから先、魔王を狙う者が出てくるでしょう。でも、その者たちを排除するたび、ローズ様が心を痛められると思うと心配なのです。」

「や、さしさ?」

「魔族は己を中心として生きています。自分を害する者を消したところで、気に病む者などいないのです。なのに、ローズ様は気になさる。それは優しさ以外の何者でもないでしょう。」

「違う。わたしは優しくなんて無い!」

力任せにディーラさんの腕から逃れ、シーツから顔を出す。まとめていない髪の毛はベッドへ散らばり、ひどい有様だ。

「怖かったの、殺されると思った。死にたくないから殺したの。優しくなんて無い。ただ、悲鳴が消えないの。虫を殺したり、魚つりをして魚さばいたりとか、お肉だって食べるし、命を奪って生きていることぐらい分かってるけど、でも。」

ぱたりとシーツにしがすが落ちる。ディーラさんが、今度は優しく抱きしめてくれた。

「簡単に死んじゃったの。わたし、殺したんだよ!？」

「そうですね。」

「怖くないの？わたし、その気になったら魔界滅ぼせるんだよ?」

「そんなことしないでしよう?」

「・・・しない。」

「なら怖くありません。」

「でも!」

言い募るわたしの口を手のひらで閉じて、ゆっくりと頭をなでられる。心地よさに高ぶっていた精神が落ち着いて、乱れていた呼吸も落ち着く。

「相手が殺す気できたのなら、それを止めるには相手を殺さなけ



ればいけません。殺さずに止めるには、大きな實力差が必要になります。あの術に大差つけられるものなんてありません。」

「。。。。。」

「今度同じようなことがあって、殺されそうになったとき、ローズ様はどうしますか？」

咄嗟に答えられず、口の中で言葉が消えていく。死にたくなければ、殺さないといけない。でも殺したくない。

「ここで答えを迷うローズ様の弱さが、わたしは好きなのですよ。」

ふわりと優しく額に口づけられる。かっとなると、ディーラさんは楽しそうに笑っている。悔しげに睨むが、淫魔相手に勝てる訳も無く、むうつとふてくされる。

「さあ、悲鳴はまだ聞こえますか？」

耳を澄ますが、悲鳴は聞こえなくなっていた。

殺した自分を正当化しようとは思わない。でも生きるために、命を奪わなければいけないときもある。

ならばせめて、その命を背負っていいことと思った。

「ディーラさん。お腹すいた。」

温かいスープをもらうため、ベッド脇のテーブルへ移動する。あーんしましょうか、というディーラさんを押しのけ、食事を始める。

もう、悲鳴は聞こえない。

## 引きこもり生活、再び（後書き）

絶対悪は存在しないのです。という主張が入れたかっただけなんです。が、なんだかいちゃいちゃして終わりましたね。シリアスが続いたので、そろそろ浮上したい。

## 嵐がやって来た

嵐は突然やって来た。

「お主ら、わらわをたばかったなああああ！！」

猫さんたちとお茶を楽しんでいる昼下がり、部屋に小さな女の子が乱入して来たのだ。

「え？」

「きゃあ、マリア様だわっ。」

「ローズ様、お隠れを。」

「お隠れをー！」

猫さんたちにかばわれながら、わたしはとりあえず大きなソファに隠れる。肩で息をする少女はアラナさんの少女時代、という雰囲気  
の美少女だ。

ただ、梳かしたら綺麗だろう髪は毛はぼさぼさで、ドレスもほれてしまっている。まるで、狭いところを無理矢理通って来たような姿に、わたしは啞然としてしまう。

「くそ、デイーラっ。ラズ！どこじゃっ。」

机を蹴り、椅子を転し、あたりには陶器が割れる音が響き渡る。横  
の猫さんが、ああカップが、と涙目になっていて心が痛い。

「ちょ、ちよつと。何があつたのか知らないけど、いきなり入って来て物を壊すのはマナー違反でしょ？」

思わず止めに入ったら、ひゅんつと鞭のようなものがこちらを襲ってくる。咄嗟に腕でかばうと、べち、と鈍い音がして、腕に鈍い痛みが走る。

「痛っ。」

ほんのりと赤くなっている腕をさすっていると、今度は目の前の少女が呆然としていた。

「な、わらわの鞭を受けて腕が落ちないだっ！？」

物騒なことを言う少女が持っている無理は、きらりと銀色に光っている。どうみても素材は金属で、しかも刃物のような輝きがある。短い刀身をいくつもつなぎ合わせて作られたものなのだろう。そんな凶器に打たれたはずの腕はほんのり赤いだけで傷一つない。

「・・・あれ？」

「あれじゃないわ、お前は何者だっ。」

「なにものって、ええつと・・・。」

「魔王様ですよ、レルトリーア。」

呆れたような顔をしたアラナさんが部屋に入ってきた。その後ろには憤怒の表情をしたラズに笑いをこらえているディーラさんもいた。

「ま、魔王様じゃと。このちんくしゃが、魔王様じゃというのかえ！？」

「ちつ、ちんくしゃ！？なによ、そんなこと言ったら、あんただってチビじゃない！！」

「わらわをチビと申したな、チビ・・・チビなどとお！」

「はいはいはい。ローズ様、落ち着いてください。これ以上暴れたら猫たちが泣いてしまいますよ。」

「うぐ。」

「レルトリア、これ以上魔王様の私室を荒らすなら牢屋行きだからな。」

「ぬう。」

お互いに弱いところを疲れれば、消化不良でも黙らざるを得ない。ぶすつとした顔でディーラを見ると、ぼんぼんと頭をなでられた。

なんだかひどく子供扱いをされているようで、カリカリしている自分が恥ずかしくなる。

「お主らが揃うということは、そのちんく・・・娘が魔王様だというのは真実のようじゃな。」

尊大な態度にやはりイラっとくするが、大きく息を吐き気持ちを落ち着ける。

「そうよ。魔王の魂なんてものをもらっちゃったお陰で苦労してるの。」

少し口調に棘が混ざったが、これくらいは許されるだろう。

「・・・。三公とは別に、魔界の神殿を治める神殿の長をやっている、マリア・レルトリーアだ。イーオと共に、魔王様を見守って来た者であり。お主の教育係でもある。」

教育係、という言葉にわたしは疑問を抱いた。なぜなら、もうディーラさんにアラナさん、ラズの三人からいろいろと教えてもらっているからだ。

「その様子だと、わらわのことはいつさい聞かされていないようだな。」

「レルトリーア、その話は・・・。」

マリアの言葉に、アラナさんが焦ったように前へ出る。しかし、マリアがひと睨みするとアラナさんは言葉を飲み込み、下がった。

「わらわをたばかった罪は重い、がしかし、それ以上に魔王様をたばかった罪は重い。そうは思わんか、三公よ。」

沈黙が重く部屋を支配する。わたしは何がなんだか分からず、口を出せない。

「よい。ここで全てを話そう。・・・猫たち、人数分の茶をここへ出したら速やかに立ち去れ。」

わたしは気まずそうな三人の顔と、なぜか怒っているマリアの顔を見て、この前見た夢を、

『真実は残酷で、そして美しい』

そう言い切った、先代魔王を思い出していた。

## 嵐がやって来た（後書き）

ひつつつつさしぶりです。生きています。わたしは生きています。秋から春へワープしてしまった作者は、元気です。こちらもやはり不定期ですが、消えはしないです。きつと!!



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9802o/>

---

魔界と魔王と働く引きこもり

2011年4月21日20時09分発行